

BEVI の背景理論 (I)

— EI モデルにおける「信念」と「価値観」 —

永井敦

1. はじめに

近年日本の高等教育機関において、留学の「客観的」効果測定に関する需要が高まる中、BEVI と略称される Beliefs, Event, and Values Inventory (BEVI, 2019) という心理測定尺度／ツールに大きな注目が集まっている¹。また、永井 (2018、2019) など、日本語で書かれた研究論文も現れ始めており、実務的のみならず学術的な関心も高まっている。

ただ、永井 (2019) が「留学プログラム担当者が BEVI を無批判的に、留学の効果測定のための万能ツールとして捉えてしまうことを懸念」(p.8) しているように、BEVI が持つ道具的価値のみに目を向け、その心理測定学的性質やその背景理論について、BEVI 実施担当者が十分に理解していない場合、BEVI の表層的な使用につながり、教育への応用可能性も限られる。だが、BEVI がなぜそのようなデザイン、構造になっているかが十分に理解された場合、BEVI は誰が、なぜ、何を、どのような条件で学ぶのかについての説明力の高いモデルを提供し、学習へ大きなインパクトをもたらす変容的学習 (transformative learning) や成長および発達を促進する強力なツールとなる (Shealy, 2016)。

しかし、BEVI についての文献は、主に研究者向けに英語で執筆されており、必ずしも我が国の BEVI 実施担当者にとって理解が容易とは言えない。そのため、BEVI に関する理論的な内容を、最低限の正確さを保ちつつ、より一般的な読者に理解しやすい形で紹介することには価値があり、その目的のために本稿は執筆された。

本論文では、BEVI の背景理論とされる EI (Equilintegration) モデル²について、特に「信念 (Beliefs)」と「価値観 (Values)」の概念について解説する³。また、BEVI の関連文献で用いられている用語の日本語訳は定着していないことが多いため、本稿では、やや

¹ 例えば平成 28 年 12 月には、東京で文部科学省後援による「留学の学習成果分析 (BEVI-j) シンポジウム」が開催された (<https://www.hiroshima-u.ac.jp/news/36769>)。また、平成 30 年度「大学の世界展開力強化事業～COIL 型教育を活用した米国等との大学間交流形成支援～」において、BEVI が COIL 型教育の効果測定のために用いられていることも、BEVI への関心の高さを示している (<http://jp.thebevi.com/about/projects/>)。

² なお、関連文献 (例えば Shealy, 2016) では EI 理論という言葉と EI モデルという言葉がそこまではっきりと区別せずに使用されているため、本論文でも両者を明確には区別していない。なお、参考までに、印東 (1973) は心理学におけるモデルを「関連ある現象を包括的にまとめ、そこに一のまとまったイメージを与えるようなシステム」と定義している。

³ 本稿執筆にあたっては Shealy (2016) 所収の “BELIEFS, NEEDS, AND SELF: THREE COMPONENTS OF THE EI MODEL” という論文を基礎的な参照文献とした。本稿では EI モデルの根本となる概念である「信念」(および価値観) に焦点を当てるが、別稿 (準備中) でモデルの重要な構成要素である「欲求 (Needs)」と「自己 (Self)」についても解説を行う予定である。

煩雑になるが必要に応じて原文の英語表現も併せて提示する。

最後に、本論文における議論の限定をここで行っておきたい。本稿は留学プログラムの実務担当者が BEVI というツールをよりよく理解するため、その背景理論である EI 理論の解説を提供するという応用的な目的のために執筆された。そのため、例えば信念や価値に関する先行研究を網羅的に紹介することはしない。また、Shealy (2016) で提示されている詳細な議論を全て取り上げることもしない。

以下ではまず、EI モデルにおける信念と価値観について、その定義や性質、獲得、維持、変化について見ていく。

2. EI モデルにおける信念と価値観

2.1 EI モデルにおける「信念」の作業的定義

BEVI の基盤である EI モデルにおいて「信念」は最も基礎的な分析単位 (most basic unit of analysis) であり、以下の特徴を持つ (Shealy, 2016, p.48)。

(「信念」は)

1. 内化された別個の現実 (discrete version of reality) (自己、他者、世界一般に関する心的表象⁴) であり、欲求、感情、試行、行動の経験と表出に影響、媒介する
2. 認知的複雑さ (cognitive complexity) と情意的強度 (affective intensity) という二つの次元において変化する⁵
3. 相対的に「正しい／誤っている」、かつ (または) 「良い／悪い」として、主観的に経験される
4. 経験的に検証可能であることもあれば、不可能なこともある (ある信念が正しいか、誤っているということを示すこと、確実に実証することはできないかもしれない)
5. 意識的にアクセス可能であることもあれば、不可能なこともある (人は自身の信念について自覚していないかもしれない)
6. 意識的にアクセス可能である場合、典型的には、相対主義的な言葉を用いて、自己、他者、そして世界一般についての「真実」や「善さ」として言語化される
7. 典型的には他の信念と相乗的關係 (synergistic relationship) を持ち、ある方向性の中で述べられた信念は、その逆の方向性において、相対的な程度を持って存在する一つ、または複数の信念としばしば対応している

⁴ 心的表象という言葉がわかりにくい場合、心の中でのイメージと理解してもらえれば良い。

⁵ この二つの次元については、Shealy (2016) の中で、はっきりと言及されていないが、「次元において変化する」(ここでは各次元で異なる量的な値を取り得る、ということの意味する) ことから、本稿の 2.2 節の「信念の四つの次元」と 2.4 節の「信念の連続性と方向性」の議論を総括したものであると考えられる。

8. 四つの相互に関連する「信念の次元 (dimensions of beliefs)」(好ましさ、正しさ、強さ、一貫性)と四つの「自己アクセス点 (points of self-access)」(堅構造、柔構造、構造亀裂、構造空間)によって特徴づけられる
9. 「揺るぎない確信」から「漠然とした懐疑主義」と、信念の連続体の中で顕在化する
10. 人間の中心的欲求(食欲、愛着、情意、承認、活性、所属、実現、調整、意識等に係る欲求)に資するために存在し、核自己 (endoself)、媒介自己 (mesoself)、殻自己 (ectoself)、外的自己 (exoself) という自己の四つのレベルの間の相互作用のから現出する

以下の各節において、これらの特徴について説明していく。なお、EI モデルでは「価値観」は信念と同じ心理的空間において関連している概念とされるが、価値観は区別可能な二つ以上の信念の集合体を意味する(信念が最も基礎的な分析単位と仮定されていることを思い出されたい)。また、EI 理論では、信念と価値観の他に、さらなる上位概念として「スキーマ」と「態度」(意味は類似しているが、前者は典型的には臨床心理学で、後者は社会心理学でそれぞれ用いられる)を併せた概念である「スキーマ的態度 (schemattitude)」が存在する。すなわち、区別可能な二つ以上の価値観が集まったものがスキーマ的態度である。最も上位の概念として「世界観 (worldview)」があるが、これは個人において内化された信念、価値観、スキーマ的態度のゲシュタルト(部分の総和で捉えられない全体的構造)として理解される。ある世界観の中において人は自己、他者、世界一般を経験し、説明する。

なお、信念が価値観を構成するという見方は、多くの心理学者に支持されていることに言及しておきたい。例えば Leuty (2013, p.363) は価値観に関する関連文献をレビューし、以下の共通の定義的特徴を見出している。

(「価値観」は)

- (a) 複数の信念である
- (b) 望ましい最終的な状態や行動と関連する
- (c) 個別の状況を越えて一貫している
- (d) 行動と事象に関する選択と評価を導く
- (e) 相対的重要度によって順序付けられている

(a) から明らかであるが、価値観が信念から構成されるという点について、研究者間で合意が見られる。ただし、信念および価値観と、スキーマ的態度や世界観との関係については、Shealy (2016) が「信念の根本的性質、特徴、ダイナミクスを定義的側面から慎重に検討することで、信念という構成単位から成る価値観、スキーマ/態度、そして世界観

についてより理解しやすくなる」(p. 49)と述べているように、研究方略として仮定されている。価値観より上位レベルの構成概念については、研究(特に理論的研究)の蓄積はまだ十分ではないため、今後の研究が期待される。

まとめると、EI モデルは信念を基礎的な単位とし、価値観、スキーマ的態度、世界観が階層的に構造化されているのが特徴的である。この点が理解されれば、BEVI という測定ツールの中で、質問項目の一つ一つが、ある特定の信念を述べた形で表現されていることに得心がいくであろう⁶。また、BEVI の質問項目となっているそれぞれの信念文は、実際に臨床心理士による治療を受けていたクライアントが発したものであり、心理学者が研究のために独自に作り上げたものではないことを付言しておく。

2.2 信念の四つの次元

ある特定の信念文があったとして、それについて人々が似た確信を持って、その信念を信じるとする。しかし、その信念の支持の仕方については人によってかなり異なり得る。その違いを EI モデルは以下の四つの次元で捉える。

- (1) 「好ましき」(favorability) : ある信念を「良い」 / 「悪い」と考えるか
- (2) 「正しき」(veracity) : ある信念が「正しい」 / 「誤っている」と考えるか
- (3) 「強き」(intensity) : ある信念が強く支持されているかそうでないか
- (4) 「一貫性」(congruency) : ある信念が他の信念と一貫していると経験されているかそうでないか

ここで、説明のために例⁷を挙げると、ある宗教の敬虔な信者 A は「神に救われるには毎日祈りを捧げなければならない」という信念を**良い**と考え、また、**正しい**ことと見なし、この信念を**非常に強く支持している**。また、この信念は A の中で、他の信念(例えば「神は我々を助けてくれる存在である」と**一貫する**形で存在している。しかし、ある同じ宗教の信者 B は、科学的な知識を根拠に、問題の信念が実は**誤っている**かもしれないと考えているが、この宗教の信者として、この信念を一般的には**良い**ことと捉え、**ある程度**支持している。だが、この信念は B の中で他の信念(例えば「科学は世の中について**真実**を明らかにしてくれる」と**矛盾した**形で存在しているかもしれない。信者 A と B はどちらも、当該の信念を支持しているが、その様相はかなり異なっていることがわかる。このように四つの次元で考えることで、ある特定の信念に関する人々の捉え方の差異を、細かく分析

⁶ Shealy (2016, p.48)によると価値観は BEVI の中での下位スケールまたは下位要因に相当し、スキーマ的態度がいわゆる BEVI の 17 のスケールの 1 つ 1 つに相当する。世界観は BEVI の全体スコアに相当する。

⁷ ここで挙げている例は、あくまで EI モデルについてより良く理解するために著者が仮想的に作成した例であり、特定の立場や宗教を支持または否定するものではない。

することが可能となる。EI モデルにおいて我々が何を、どのように、そしてなぜ信じるのかを理解するために、これら四つの次元は有用な視点を提供する。

2.3 四つの自己アクセス点⁸

自己の信念へのアクセス（信念を自分自身が知っている、その知り得る程度および信念が他人に知られている、知られ得る程度）が可能かどうかは、それらの信念が「堅構造 (Hard Structure)」（強固に抱かれており、厳格に固定されている）、「柔構造 (Soft Structure)」（あまり強く抱かれておらず、変化しやすい）、「構造亀裂 (Crack in the Structure)」（二つ以上の信念が相対的に矛盾する言葉を通じて経験されている）、「構造空間 (Space in the Structure)」（信念が一つも内化されていない心理的空間）の観点から経験的に組織化されているかどうかによる。

2.4 信念の連続性と方向性

EI モデルにおいて、信念を支持する程度は「揺るぎない確信 (Committed Certitude)」（ある信念について、自覚的に経験された、または明確に表明された疑念を持たず、それを完全に受け入れている状態）から「漠然とした懐疑主義 (Noncommitted Skepticism)」（ある信念について受け入れようとは思わないが、現段階ではその信念を完全に拒絶するほどではない状態）まで連続体を構成すると仮定されている。

例えば図1の信念文（“もし何かをきちんとやりたいなら、自分自身でやらなければならない。”）の場合、この信念は概念的にも経験的にも別の信念と対応関係を持っているとは考えにくい。そのため、単独型の信念とされ、低い両立性 (low compatibility)（つまり、別の信念と、同じ方向性、または逆の方向性といった有意義な関係にあるわけではない）を持ち、それゆえに低い予測的対応性 (low predictive, match or nonmatch)（問題の信念が別の信念と対応させることができる場合は対象者の反応を予測できるが、そうではない）を持つ。

一方図2のような信念のペア（“神の言葉は私にとって十分である”及び“宗教は時に益よりも害をもたらすと思う”）の場合、概念的に明らかなように、前者の信念は後者の信念と相反する関係を持っていることが分かる。したがって、ペア型で、高い非両立性を持つ。すなわち、前者の信念を強く肯定的に信じている場合（「揺るぎない確信」のレベル）は、後者の信念については強く否定的に信じる（「漠然とした懐疑主義」か、それよりも強い懐疑主義のレベル）ことが予測される。この意味で、概念的に強い結びつきを持つこの信念ペアは、より広がりのある連続体を成していると言える。

なお、ある個人がこの信念の連続体の中においてどの位置を占めるかは、先に見た四つ

⁸ これについてはEIモデルの「自己」を扱う予定の別稿でより詳しく扱う。ここでは、人が己の信念にアクセスするためには、大きく四つの入り口があると理解してもらえれば良い。

の信念の次元が相互作用した結果決まるとされている。

“もし何かをきちんとやりたいなら、自分自身でやらなければならない。”

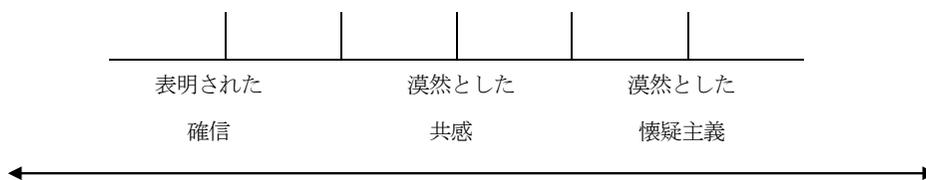


図1: 単独型、低い両立性、低い予測的対応性を持つ信念の場合

“神の言葉は私にとって十分である。”

“宗教は時に益よりも害をもたらすと思う。”

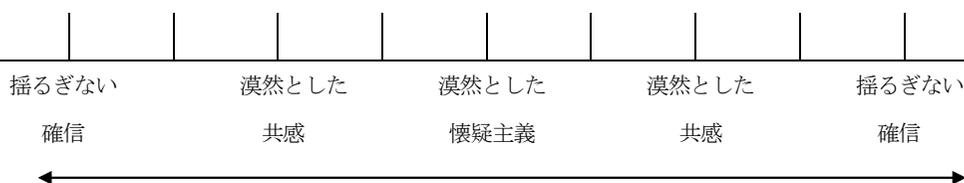


図2: ペア型、高い非両立性、高い予測的非適合を持つ信念の場合

2.5 「無信念 (nonbelief)」という信念

宗教に関わる領域では特に顕著に見られるが、世の中には「何も信じない」という立場をとる人々がいる（例えば進化生物学者のリチャード・ドーキンスなどの著名な無神論者を思い浮かべてもらえば良い）。Shealy (2016) は、この場合、これらの人々は信念を持たないというより、ある特定の事柄を信じないという信念を持っていると見なす。なぜなら無神論者達は、神が存在すると信じるに足りる十分な根拠がない、と信じているとも言えるからである。したがって、経験的に明確に証明できない事柄については、何らかの信念が不可避免的に入り込んでくるといえる。

2.6 信念と価値観の獲得について

Equilintegration (EI) モデルの「E」部分はフランスの発達心理学者 Jean Piaget が提唱した「均衡化 (equilibration)」の概念に由来している。Piaget (例えば Piaget, 1977) は、子どもがどのように世界についての知識を獲得するかについて関心を持ち、独自の発達モデルを構成した著名な心理学者である。

Piaget の観察によると、子どもは、似ていることを手掛かりとして、世界の事物や情報

をカテゴリー化し、スキーマ/シエマ (scheme) と呼ばれる認識の構造を構築していく。このプロセスは「同化 (assimilation)」と呼ばれる。子どもは、世界に関する知識が増加するにつれ、既存のスキーマを絶えず更新する (既存の枠組みを修正する) 必要があり、これは「調節 (accommodation)」というプロセスである。そして子どもは、これら両機能がうまく相互作用し続けることで、より複雑な認知構造を発達させていく。Piaget はこの同化と調整のバランスがうまくとれている状態を「均衡化 (equilibration)」と概念化し、逆にバランスが崩れている状態を「不均衡化 (disequilibrium)」とした。均衡化は状態でもあり、また、不均衡状態から均衡状態へ至る過程も意味している (Wadsworth, 1996)。プロセスとしての均衡化では、子どもが新たな種類の経験に出会った際に均衡状態が崩れ (不均衡化)、スキーマへの対象の同化と、対象に対する構造の調節が相互に調整し合い、均衡を回復していく。これが Piaget にとっての発達である (なお、Piaget の「均衡化」については、日下 (1980) が参考になる)。ただし、EI モデルではこの特定の発達モデルを支持しているわけではなく、あくまで均衡化に関する Piaget の洞察を参考にしつつ、信念や価値観がいかに関与されるか (変化するか) を捉えようとしている。

この Piaget の理論からも示唆されるように、信念と価値観の研究では「内容」(何を信じ、価値があると見なすか) のみならず、「プロセス」(どのように、どのような条件下で信念と価値観が獲得されるか) および「構造」(認知・情意のどのような構造で、そして、パーソナリティや「自己」の側面とどのような関係を持ちつつ、心/脳のどこにどのように信念と価値観が保存/記憶されているか) も重要な問いとなる。また、特に現代心理学の視点では、神経生物学 (いわゆる脳科学) 的な考察も重要であり、信念や価値観の神経生物学的基質の研究も進み始めている。Newberg & Waldman (2006) は神経生物学的なアプローチを取り、信念の獲得には知覚、認知、社会的総意、そして感情的価値観の四つの要因が相互作用すると主張している。また、彼らは信念の形成については、我々が育つ家庭的・社会的なコンテキストが大きく影響を与えると述べている。これらの重要な知見は EI モデルにも反映されており、実際にその測定方法である BEVI においても「事象」(BEVI の E を意味する Events) に関わる質問項目として反映されている。

2.7 信念と価値観の安定性と抵抗性

前項で、信念と価値観がどのように獲得されるのかについて見てきたが、信念と価値観は一度確立されると、その構造は不変とまではいかないが、かなりの程度安定的 (言い換えれば変化に抵抗的) であるということは、研究者も実践家 (カウンセラー、教育者など) も経験的に認めるところである。なぜ信念と価値観が変化に抵抗性を持つかについては、臨床心理学でいう (自己) 保存プロセスという概念が説明を与えてくれる。

臨床心理の現場において、Adler & Bachant (1998) は、「抵抗 (resistance)」は (心理

療法) クライアントが自己の精神世界を保ち、その世界が他者に見られ、知られ、変化させられることを防ぐ試みであるとする。これはたとえクライアントが(介入に抗って)現在の精神構造を保つことが、将来達成したいと願う人生の目標を妨げると自覚していたとしても生じるプロセスである。これは Castonguay (2000) が観察するように、「感情の探求や、長期にわたって抱いてきた信念や人間関係の在り方に疑いをかけることは、その対象者の心にとって脅威的である」ことを考慮すると、人の精神世界にとって必然的で、むしろ健全なプロセスといえる。そしてこの種の抵抗は我々が日常的に経験する事柄でもある(読者の身近にいる、ある特定の信念について立場を全く変えようとならない人を思い浮かべてみると良い)。よりグローバルな視野で考えてみた場合、現在、世界の各地で原理主義的な思考が勢力を増していることも、この信念の抵抗性と無関係ではない。

また、社会心理学の分野でも Pomerantz, Chaiken, & Tordesillas (1995) は「埋め込み(embeddedness)」(態度や問題が個人の全体的な「自己概念、価値観システム、および知識構造」と結び付いているか)と「傾倒(commitment)」(個人がどの程度ある立場に傾倒しているか)の二つの要因が、態度や信念、およびそれらの変化への抵抗の相対的な強さを規定していると主張している。例えば、ある個人が特定の立場にかなり傾倒しており、その態度が彼/彼女の持つ価値観構造と深く結びついている場合、その信念は容易に変化することはないと予測される。

2.8 信念と価値観を変化させるための要因

最後に、信念と価値観を(介入的に)変化させる(transform)際に、重要となる要因について見る。信念と価値観は個人の育ってきた環境に大きな影響を受けつつ(Newberg & Waldman, 2006)、Piagetの均衡化に基づく学習メカニズムを通じて獲得される。そして、それらは認知システムとして一度確立されると、かなり安定性(変化への抵抗性)がある。しかし、教育に関わる人間であれば誰しも、ある教育プログラム参加者の信念や価値観を最終的には我々が望む方向へ変化させていきたいと考えている。一見相反するかのように見えるこの文脈において、個人の信念や価値観を揺るがす学習経験を提供できる、留学の教育的価値が明確される。すなわち「高インパクトな教育実践(High-Impact Educational Practices)」(Kuh, 2008)としての留学プログラムという捉え方である。

Shealy (2016) は国際的・多文化的・変容的学習のプロセスとアウトカムの測定のために企画された、複数年、複数機関の共同プロジェクトである *Forum BEVI Project* の成果の一つとして、七つのD(The 7Ds)を挙げている(表1参照)。これは何らかの教育プログラム参加者が、何らかの変化を目的とした介入を受けた結果、なぜ彼/彼女らの信念と価値観が変化するか(またはしない)のか、そして、誰が、どのような程度で、いかなる条件下で変化するかを説明する要因群である。

表1 7つのD

長さ (duration)	どのくらい介入活動が続いたか
差異 (difference)	介入活動が提供する経験が、対象となる「自己」が慣れている経験とどのくらい異なるか
深さ (depth)	対象者が、介入活動が提供する全ての経験について、それらを実際にどの程度まで自分のものとして経験する能力を持つか
決定 (determine)	フォーマルな、またはインフォーマルなアセスメントを通じ、介入者が対象者についてどの程度理解しているか
デザイン (design)	対象者への理解や、介入プログラムの慎重な検討および開発に基づき、介入活動の質はどうであるか
実行 (deliver)	介入者が介入活動のもたらす変化への潜在力をどの程度引き出すことができるか
報告 (debrief)	介入活動の前後および実施中に、介入者がどこまで深く対象者の経験の性質を評価し、そこで得られるフィードバックを将来の介入活動に役立てるか

Shealy (2016) によると、これらの要因のリストは「学習」それ自体に当てはまるだけでなく、様々な場面での学習者の「成長」や「発達」プロセスにも当てはまる一般的なものであるとし、リーダーシップ、教育、メンタルヘルスのそれぞれの領域で具体的な例を挙げている。

これら七つのDについては、関連する研究の結果を解釈し、統合的な理解を図るための有用な指針となるだけでなく、実務的にも、効果の高い留学プログラムの開発を行う上で参考になるだろう。

3. おわりに

本稿では、BEVI の背景理論である EI 理論について、特に「信念」と「価値観」（信念の集合体）の概念について焦点を当てて解説をしてきた。EI 理論での「信念」と「価値観」について改めて重要な点を簡潔にまとめると、「信念」は分析の基本的単位であり（セクション2.1）、程度概念をその中に含み、連続体の中に存在すること（セクション2.2 および2.4）、信念を持たない人間はいないこと（セクション2.5）、信念は社会文化的なコンテキストの影響を受けつつ、「均衡化」という学習プロセス通じて獲得され（セクション2.6 および2.7）、一度確立すると容易に変化しない安定性を持つ（セクション2.7）。応用的側面では、信念や価値観の変化を目的とする介入活動には、特に考慮すべき7つの要因がある（セクション2.8）。

本稿で見てきたように、BEVI という測定ツールがどのような理論に支えられているかを知ることは、例えば、留学プログラムの実務を担当している人間にとって重要である。なぜならば、国際教育に携わる人間が、学習者がなぜ、どのように、どのような条件下で信念や価値観を変えるのかという重要な問いについて答えるようとする場合、まずはその対象である「信念」や「価値観」というものが何であるのかを理解することが必要であり、EI 理論の正確な理解に基づき、BEVI を用いた研究と実践を積み重ねることが、最終的により良い、効果的な教育プログラムの開発や実践につながると思われるからである。かつて心理学者の Kurt Lewin が述べたように、「良い理論ほど実用的なものはない」のである。

参考文献

- 印東太郎 (1973) 「心理学におけるモデル構成: 意義・展望・概説」 印東太郎 (編) 『心理学研究法 17: モデル構成』 東京大学出版会. pp.1-28.
- Adler, E., & Bachant, J. L. (1998). Intrapyschic and interactive dimensions of resistance: A contemporary perspective. *Psychoanalytic Psychology, 15* (4), 451-479.
- Beliefs, Events, and Values Inventory. (2019). About the BEVI. Retrieved August 31, 2019, from <http://thebevi.com/about/>
- Castonguay, L. G. (2000). A common factors approach to psychotherapy training. *Journal of Psychotherapy Integration, 10* (3), 263-282.
- 日下正一 (1980) 「J.Piaget の発達理論における「均衡化」概念について」『長野県短期大学紀要』第 35 号, pp.55-64.
- Kuh, G. D. (2008) . *High-impact educational practices: What they are, who has access to them, and why they matter*. Association of American Colleges & Universities.
- Leuty, M. E. (2013) . Assessment of needs and values. In K. F. Geisinger, B. A. Bracken, J. F. Carlson, J.-I. C. Hansen, N. R. Kuncel, S. P. Reise, & M. C. Rodriguez (Eds.), *APA handbooks in psychology. APA handbook of testing and assessment in psychology, Vol. 2. Testing and assessment in clinical and counseling psychology* (pp. 363-377). Washington, DC, US: American Psychological Association.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers* (D. Cartwright, Ed.). New York, NY: Harper & Row.
- 永井敦 (2018) 「BEVIによるショート・ビジット型留学プログラムの効果分析: 「グローバル人材」は育成できるのか?」『広島大学留学生センター紀要』第 22 号, pp.38-52.
- 永井敦 (2019) 「BEVI と IDI の比較: その基本的特徴と妥当性に関するエビデンス」『広島大学森戸国際高等教育学院紀要』第 1 号, pp. 7-14.
- Newberg, A. B., & Waldman, M. R. (2006) . *Why we believe what we believe: Uncovering our biological need for meaning, spirituality, and truth*. New York: Free Press.
- Piaget, J. (1977). *The Development of Thought: Equilibration of Cognitive Structures*. (Trans A. Rosin). Oxford, England: Viking.
- Pomerantz, E. M., Chaiken, S., & Tordesillas, R. S. (1995). Attitude Strength and Resistance Processes. *Journal of personality and social psychology, 69* (3), 408-419
- Shealy, C. N. (2004). A model and method for “making” a C-I psychologist: Equilintegration (EI) theory and the Beliefs, Events, and Values Inventory (BEVI). [Special Series]. *Journal of Clinical Psychology, 60* (10), 1065-1090.

- Shealy, C. N. (2016) . Beliefs, Needs, and Self: Three Components of the EI Model. In C. N. Shealy (Ed.) , *Making sense of beliefs and values: Theory, research, and practice* (pp. 19-92) . New York, NY, US: Springer Publishing.
- Shealy, C. N. (Ed.) (2016) . *Making sense of beliefs and values*. New York: Springer Publishing.
- Wadsworth, B. J. (1996) . *Piaget's theory of cognitive and affective development: Foundations of constructivism* (5th ed.) . White Plains, NY, England: Longman Publishing.